

ハンガリーで学ぶ日本人医学生が増えている

すでに百人以上が海を渡った。彼ら彼女らはなぜ、遠い東欧の地で医学を修めようとしているのか。

「ブダペスト発」医師不足を解消せよ」との世論に押されるように、文部科学省は二〇〇八年十一月、〇九年度から国公私立大の医学部定員を約七百人増やす計画を発表した。総定員は〇八年度に比較して約一割増しで、史上最多の約八千五百人となる。

医学部への「狭き門」が多少なりとも広がることを歓迎する受験生も多いだろう。私立大医学部の高額な学費を払うことができる家庭は限られており、ほとんどの学生は国公立大への入学を希望する。しかし、その国公立大に入るには高偏差値の入試を突破する必要がある、入学する前に医師への夢をあきらめてしまう受験生も少なくない。

そうした中、国公立でも私立でもなく、海外の医学部を経て医師を目指す「第三の道」を選択する学生が出てきている。行き先はハンガリーやチェコなど東欧諸国が中心だ。留学先として候補に挙がることの多い米国や英国は入試の難度が極めて高い。また、米国人留学生を多数受け入れていることで知られる中米のカ

リブ海諸国は、学費が高い割に医学教育のレベルに疑問を投げ掛ける関係者もいる。これに対し、東欧の大医学部は英語で講義をする大学が多い上に、学費や生活費が割安なのが人気の理由となっている。

ハンガリーの入試は英語、生物、化学の筆記試験と面接だが、学力以上に「どうしても医師になりたい」という熱意を重視しているのが大きな特徴だ。昨年度の競争率は五倍だった。日本からの留学生は、看護師や薬剤師経験のある社会人経験者のほか、英語を生かして「国境なき医師団」への参加を望む者までさまざま。果たして、これらの若者たちは、迷走を続ける日本医療界にとってカンフル剤となるのだろうか。

収入源でもある外国語「コース

欧州のほぼ中央に位置し、国土の真ん中をドナウ川が貫く旧共産圏の国ハンガリー。人口は約一千万人だが、ノーベル賞受賞者の人口に占める割合は世界一。伝統的に理数系の教育に強く、医学教育のレベルも高く評価されている。この国でいま、

百人を超える日本人留学生が医師になるために学んでいる。

約二十年前、首都ブダペストにあるセメルweis大と、南部のセゲド大、ペーチ大、東部のデブレツェン大の国立四大学の医学部に英語のコースが設けられた。現在は日本のほか、イスラエル、トルコ、ノルウェーなど世界約二十カ国から学生を受け入れている。

学費は年間百数十万円で日本の国立大医学部と比べると多少割高だが、物価は日本よりかなり安い。また、家賃などの生活費を含めた総コストは同程度になる。ハンガリー経済は〇八年の米国発の金融危機で多大な影響を受けたものの、各大学は留学生の授業料をドル建てで集めているため大きなダメージを免れた。日本からの留学生にとっては、円高の恩恵にあずかれるという旨みもある。座学であれ臨床であれ、講義はすべて英語で行なわれる。このため、英語や生物などの理数科目に自信がない学生は、事前に一年間の予備コースで学んだ後、医学部に進学することもできる。医学部は日本と同じ

六年制。各大学ともハンガリー語、英語、ドイツ語の三コースが設置されており、各コース百二十〜四百四十人で一学年平均四百人が学ぶ。

ハンガリーの大学では自国民の授業料は無料となっているため、各大学とも留学生向けの英語やドイツ語のコースが貴重な運営資金獲得の手段となっている。セゲド大の担当者「外国人留学生から得た授業料が医学部の年間予算の三分の一を占めている。われわれにとって、外国語コースは教育であると同時にビジネスでもある」と説明する。

ハンガリーの医学部は、多くの教授が英語やドイツ語を話すことができるため、「ハンガリー語と英語」「ハンガリー語とドイツ語」といったように、一人の教授が二つの言語で同じ内容を講義できる強みを持つ。人や設備は増やさなくとも、ビジネスチャンスが存在していたというわけだ。

「外貨」の半分は、労働時間が増えた分の教授の人件費などに充てられるが、残りは大病院の設備投資などに回し、医療の質と教育の質を高



セゲド大学の解剖学の授業風景

めることに使われているという。

教授の一人は「ハンガリーの文化に触れた留学生が自国に戻れば、何人もの『大使』を送り出すのと同じ効果がある」と、文化的な面でもメリットが大きいことを強調する。

医師免許はEUで通用

では、日本人の留学生たちはどのような思いを胸に海を渡って行ったのだろうか。

看護師を六年間していたという女子学生は、かつて東京都内の病院で働いていた。当直勤務の夜のことで、高齢の入院患者から緊急の呼び出しベルが鳴った。患者はとも苦しそうにしているのに肝心の医師がやってこない。捜しに行くに若い医師は部屋の隅でカルテとにらめっこをしていた。「患者さんが苦しんでいます」。そう伝えたが、その医師は「受け持りの患者ではないから、まず資

料を見てから」と顔も上げない。なぜ先に様子だけでも見ようとしなかったのか腹が立った。入院患者と話もしていない医師、患者の異常を伝えても「データに変化がない」と聞く耳を持たない医師。現場の医師たちを見るうちに「自分ならもっと患者の話聞けるのに」と、自ら医師になることを決意したという。

祖父を誤診で亡くした三十二歳の男子学生は、高校を卒業する時に私立大の医学部に受かったが、金銭的な余裕がなく通うことができなかった。医師への夢を捨てきれず、システムエンジニアを経て再び医学の道志したというこの学生は、「人間を相手にする医師という職業には、社会人経験が絶対にプラスになると思う。日本の医学部入試は社会人に不利な仕組みになっており、海外を選んだ」と話す。

ハンガリーで国家試験に合格して取得した医師免許は汎用性が高く、欧州連合(EU)二十七カ国で通用する。しかし、日本で医師として働くには、日本の医師国家試験にも合格しなければならぬ。医師国家試験の受験資格は、各大学の専門課程の授業時間数を基に厚生労働省が判断するが、ハンガリーの大学はこの基準をクリアしている。あとは厚労省が「大学の成績が良好かどうか」を個別に審査し、受験資格を判断することになっており、これは例

えば米ハーバード大の医学部卒業であっても同様だ。

現在、医師不足はヨーロッパでも深刻な問題となっている。しかし、日本のように医学部の入学定員を増やす国ばかりではない。ハンガリーの日本人留学生を支援している「ハンガリー医科大学事務局」(東京都新宿区)によると、ノルウェーは自国の医師養成にこたわらず、海外の医学部に留学させた後帰国させることを国策としている。

医師一人を養成するには数千万円が掛かると言われており、自前で育てるよりは海外の養成システムを利用した方が得という発想だ。現在の世界の医学をリードしているのは米国であり、最先端の情報を得るには英語で医学を学ばなければならないという事情も、そうした施策を後押しする背景となっている。

一見、良いことづくめのように見える医学部留学だが、「ハンガリー医科大学事務局」は「日本の国立大に入れないからという程度の心構えでは卒業はおぼつかない。入りやすい分だけ進級していくのが大変で、医師になるための厳しいトレーニングに耐える精神力が必要だ」と安易な留学希望にくぎを刺す。

医学部に限らず日本の大学教育では「学生を入り口で絞るのか、間口は広げ出口のハードルを上げるのか」が古くから議論されてきた。確

かに日本の医学部が学力試験である程度優秀な人材を選抜してきたことは事実だ。しかし、本当に医師になりたい者、患者ときちんとコミュニケーションが取れる者を入試でどれだけ見分けることができるだろうか。

長年医学部改革に取り組んできた国立大の教授は「自分自身の力で問題を発見し解決する力や、生涯にわたって学び続けようとする医師に不可欠な態度は、大学入学後に簡単に教えることはできない」と、日本の医学部入学生の資質に厳しい目を向けている。

日本人留学生たちは「ハンガリーの大学は医学を志すすべての者に門戸を開いている。そこから先は自分の努力次第だ」と口をそろえる。二十歳の女子学生は、深夜二時まで勉強して朝七時に起きる受験生のような生活を送っている。つらいときに自分を支えてくれるのは、やはり「どうしても医師になりたい」という強い気持ちだという。

「学習すべきことは非常に多く、医学を学ぶことは想像以上に大変だと日々実感している。でも、医師になるための勉強だから頑張ることができる」

「ハンガリー医科大学事務局」が東京に開設され、日本人留学生の受け入れが始まってから三年。早ければ二〇一二年にも日本人の卒業生がハンガリーの大学を巣立つ。